

東北震災の時に震災に遭遇した病院に勤務しており、今は東北大学にいる医師が話してくれた。「養殖場から逃げ出した鮭が谷の川を上って行った」。

養殖場で生まれた鮭は母親の生まれた場所を知らない筈なのに、母親の地へ戻っていったそうだ。

私は信州で生まれて、信州で育った。春、母親のお墓参りに行った。

中央高速道路は信州の高地に向かって緩やかに上ってゆく。途中、駒ヶ根のインターで下りて駒ヶ岳の麓の養命酒の工場を見学した。とんかつソースを2本買った。

私が学生であった頃、同級生は夏休みや春休みになると北海道や東北の地に旅行に出かけたが、私は信州に帰った。国鉄の中央線から飯田線に乗り換えて天竜川にかかる橋を歩いて渡って帰った。

「旅は帰る所があるから楽しい」と高見順の詩にあった。私にとって名古屋での生活は旅をしているような気分であり、私の帰る所は駒ヶ岳の麓であった。

結婚して車を買った。子供たちを載せて、木曽谷を走る国道19号線で、塩尻を回って家へ戻った。

次第に帰省するのは正月とお盆だけになっていった。そして旅から帰る家が名古屋へ移った。

老い始めた両親を残して名古屋へ戻る時は悲しかった。

お盆で帰省して残暑の名古屋へ戻るといつも「田舎に親を置いて都会に出て、帰っていかない田舎の長男の後ろめ

たさ」に悩んだ。

私は母を私たちの家族の路線に乗せたかった。

母が胃癌で死ぬ時、私はニューヨークにいた。母は健康診断で胃癌が見つかった。家族を連れて信州へ帰った。途中、アラスカの飛行場で雪が舞っていた。母を幸福の路線に乗せる前に死んでしまった。母の火葬場の煙は駒ヶ岳の頂上に昇っていった。

父の死は深夜であった。タクシーで中央高速道路を走った。私は酔っていた。

故郷への往路に、私の心はいつも儂い悲しさを抱いていた。その感情の糸を辿るように家路についた。母が死に、父も死んだ。

養命酒の工場から高速道路に戻ってお墓に着くと、誰かがお墓の掃除をしていた。父や母は、近所の人達のお世話になっていたに違いない。私は長年のご無沙汰と不義理に挨拶を躊躇した。

しかしその人は明るい声で「コンニチハ」と挨拶してくれた。幼馴染だった。

駒ヶ岳の見える小高い丘で私も「コンニチハ」と言った。

駒ヶ岳は雪が冠っていた。3月のお彼岸であった。

